

百済王氏存続の要因

山下 剛 司

【抄録】

百済王氏は奈良・平安初期に活躍した百済系帰化氏族である。その活動分野は多方面において見出すことができる。百済王氏が故国滅亡により日本に帰化して以後、飛鳥時代より平安初期に至るまで数多くの高級官僚を朝廷に輩出し続けた。

藤原氏を始めとする日本古来の氏族より排斥されることなく、繁栄を続けられた要因は何所にあるのか。その要因を、時の朝廷・為政者側が百済王氏に期待した役割と、百済王氏自身の動向を見ることにより、明らかにすることができる。それは、百済王氏の持つ二つの特色、つまり百済国義慈王の直系の子孫という「貴種性」と、「先進文化・異文化の担い手」という面である。この二点に着目することにより、百済王氏が飛鳥時代より平安初期においてどのような方法を用いて繁栄したかを考察する。

キーワード…百済王氏、帰化系氏族、百済郡、交野、禁野

はじめに

百済王氏は奈良・平安初期に活躍した帰化系氏族であり、その活動分野は多方面において見出すことができる。また、先行研究において百済王氏の活動に関する数々の論稿が発表されている。それらの研究により、新たな史実が確認され、また、それに伴い更に論じなければならない問題点も多く浮き彫りにされてきた。

百済王氏に関する研究は戦前から存在した^①が、それらは個別的研究が中心で、初めて総体的な研究を行ったのが今井啓一氏^②である。今井氏は百済王敬福の活動・東北経営・摂津国百済郡の開発・河内国交野への移住について研究され、この研究が

現代における百済王氏研究の礎となった。大坪秀敏氏⁽³⁾は、今井氏の研究を受けてそれを更に個別的に深化させ、百済王氏と為政者との私的な関係強化が、結果的に、百済王氏の地位向上につながったとされた。利光三津夫氏⁽⁴⁾は、摂津国百済郡に百済王氏を中心に、百済系帰化氏族が集まり、故地回復のための組織が存在したとする「百済亡命政權説」を唱えられた。長瀬一平氏⁽⁵⁾は、華夷思想の関係で百済王氏は天皇に奉仕する百済王権の象徴であり、百済滅亡後には百済王権は天皇に包摂されたとした。また、寛敏生氏⁽⁶⁾は、百済王氏は王権といえる程の権力を有していないとし、「百済亡命政權説」を批判された。

今井氏以来の、先行研究の共通認識として、「百済王氏が百済系の中下級官人層に影響力を持ち、大仏建立や東北経営などの一大国家事業に対してその影響力行使し、そのため朝廷から一定の地位を与えられ、優遇されていた」という論がある。しかし、その様なことはたして可能だったのであろうか。例えば、百済王氏が直接他の百済系帰化氏族に軍事動員をかけるなどというような、まるで主従関係の如きものが日本国内においても故国時代と同様に存在していた、というようなことを示せる直接的な史料は、これを見出すことができない。では、百済王氏はどのようにして朝廷内で一定の地位を築きえたのであろうか。

それは、時の朝廷・為政者側が百済王氏に期待した役割と、百済王氏自身の動向を見ることにより、明らかにすることができ。その際、以下の二点に注目して考察をすすめていきたい。

第一点は百済国義慈王の直系の子孫という「貴種性」である。これは、他の帰化系氏族が自らの出自を名乗る際、数百年も遡らないといけない様な、すでに滅亡した中国王朝王族の末裔や、高句麗・新羅・百済の数代または数十代前の王の子孫を名乗るの⁽⁷⁾に対し、百済王氏は義慈王の王子という、日本はもとより唐をはじめ当時の東アジア世界において公認されていた身分を持つ者であり、その出自は疑うべくも無い。これは明らかに日本国内に居る他の帰化系氏族とは異なる特色である。

第二点は「先進文化・異文化の担い手」という点である。これは東西史部や秦氏などが果たしてきた、帰化系氏族が文化・技術方面において大陸からもたらされた文明の伝播者として、日本の朝廷から優遇され、朝廷内に地位を築いてきたことと同様である。

この二点に着目し、百済王氏が如何にして朝廷内に地位を築いたのか。つまり、他の氏族から排斥されること無く、奈良・平安へと一族を存続させることができた要因を究明したい。

一 百済滅亡後の王子

本項では、百済国滅亡前後の日本国の思惑と、質として来朝していた豊璋・善光二王子との関係から、百済の王子が如何にして日本の貴族としての、百済王氏へと変化を遂げたのか、その前段階の關係性を整理してみたい。

百済救済戦争以前から日本国内には百済から二人の王子（豊璋・善光）が質として来朝⁽⁹⁾していた。半島の情勢が変化し、唐・新羅と百済・高句麗との争いが激化、百済の王統が途絶えると、百済軍指揮官の鬼室福信は日本に対し王子の帰国を要請⁽¹⁰⁾してきた。それに対し、日本側は王子豊璋を百済国王に冊立⁽¹¹⁾した上で、帰国させた。これは、日本が半島に影響力を持つために王子を利用したものであり、豊璋は百済軍の指揮を執り、唐・新羅との戦争へと赴くことになる。

しかし、豊璋と鬼室福信の内部分裂などもあり、百済国は滅亡し、豊璋は高句麗へ逃れるも、そこで唐軍に捕縛され、唐においてその生涯を閉じることになる。日本は長期間質として日本国に滞在した王子を国王に据え、援軍を送ることで、百済に、ひいては朝鮮半島に影響力を及ぼそうとした。しかし、この目論見はつづれ、朝鮮半島への影響力を完全に失ってしまった。このため百済に帰国できず、日本に滞在し続けているもう

一人の王子善光は、故国滅亡により、王子という身分を喪失し、日本側としても利用価値の無い存在となってしまった。

百済滅亡後、同盟国である日本に大量の百済人が渡来⁽¹²⁾する。白村江で敗退を喫し混乱した日本は、そのなかで大量の渡来者を抱え込むこととなる。そこで、善光を百済からの渡来者集団の名目上の管理者⁽¹³⁾として位置づけ、彼らを管理しようとした。つまり貴種性の利用である。ここにおいて、初めて王子身分を喪失した善光は、朝廷の方針により、その存在価値が認められたのである。

本項のまとめとして、百済救済戦争に失敗すると、日本は外交關係を有利に進めるためではなく、百済からの大量な渡来者をまとめるために百済の王子としての地位を利用しようとした。つまり、内政に王子の利用価値を見出したのである。このような日本の政治方針の転換があったからこそ、王子は自身が有している百済の王子という「貴種性」を用いることで、日本国内で一定の地位を得ることができたのである。このことが、つまり、百済王氏という一族の誕生の契機となったのである。

二 百済王氏の活動と、朝廷側が希求する内容の変化

本項では百済王氏が行った政治的・文化的な活動と、天皇ま

たは朝廷が百済王氏側に行った事象から、当時の為政者たちが百済王氏にどのような役割を期待していたのかを考察する。

その際、以下の二点に着目する。

- ・百済王氏が有していた「貴種性」に根ざすもの。
- ・百済王氏を「先進文化・異文化の担い手⁽¹⁴⁾」として捉えていたことを示すもの。

先ず、右記の二つの要因のどちらに根ざすものかと、関係する史料を挙げ、その解説を述べる。

○摂津国百済郡の開発・百済系帰化氏族の管理 「貴種性」

『日本書紀』天智天皇三年三月条「三月。以百済王善光王等⁽¹⁵⁾居于難波⁽¹⁶⁾」(略)。

摂津国百済郡に建立された百済寺は『日本霊異記』上巻「僧憶持心経得現報示奇事縁 第十四」に、「釈義覚者本百済人也、其国破時、当後岡本宮御宇天皇之代、入我聖朝、住難破百済寺矣」とあることから、百済国が滅亡し、多くの百済人が亡命する以前から存在していた。百済人が集住し、寺院が建立され、そこに百済王氏や亡命百済人が居住させられたと考えられる。

摂津国百済郡は、百済王氏が交野に移住すると衰退し、中世には欠郡とされてしまう。この様に、百済王氏を中心として成り立っている郡であり、他の亡命百済人を故国の王族である百済王氏が管理して成り立っていたのである。また、『日本書紀』天武天皇十三年五月甲子条に「化來百済僧尼及俗人。男女并廿三人。皆安置于武藏國。」とあるように、彼らは武藏国に移住させられているが、移住以前に居住していた所在は記載されていない。しかし、それは当時、百済人が集住しているのは百済王氏が管理している摂津国百済郡というのが大前提としてあり、あえて記す必要がなかったからではないかと考えられる。また、『日本後紀』延暦十八年十二月甲戌条にある止彌若虫、久信耳鷹長らの改姓に関する解文には、「己等先祖。元是百済人也。仰慕聖朝。航海投化。即天朝降綸旨。安置攝津職。後依丙寅歲正月廿七日格。更遷甲斐國。」とあることから、初め摂津国に居住していたと考えるのが妥当と思われる。

○摂津国百済郡の開発、五部五方制に準じた郷名 「貴種性」

『和名類聚抄』に郷名の記載。「東部・西部・南部」
『日本書紀』天智天皇十年六月己巳条

「六月丙寅朔己巳。宣百済三部使人所請「軍事」。」

『大日本古文書』卷二十四「從人勸籍」

「攝津国百斉郡東郷長岡里戸主調乙麻呂之戸口調大山年十八、右一人、調乙麻呂從人。」

『大日本古文書』卷十三天平勝宝九歲四月「西南角領解」

「竹志淨道年廿 攝津国百斉郡南部郷戸主正六位下竹志麻呂戸口。」

摂津国百済郡で用いられた郷名は日本で用いられるようなものではなく、百済国で用いられた地方行政域名につける規則正しい方位を用いた名称で、これを百済郡にも用いていた。これもまた、百済王氏を中心に、旧百済国内の地名を用いることで、帰化人達にはまるで、百済王が治める百済国の故郷の如く、その目に百済郡が映ったのではないか。このことは、混乱を抱え何とか日本にたどり着いた帰化人たちを冷静にさせ、新たな地で生活を再建する契機となったと考えられる。

○天武期、種々の珍品奏上「貴種性」

『日本書紀』天武天皇四年正月丙午朔条「四年春正月丙午朔。大學寮諸學生。陰陽寮。外藥寮。及舍衛女。墮羅女。百済王善光。新羅仕丁等。捧藥及珍異等物」進。」

百済王氏存続の要因（山下剛司）

当時の先進技術である陰陽道や薬学に関することは自ずと当時の先進国である帰化人がその任に就いていることが多く、結果、この記事に登場する者達はほぼ、帰化系氏族であり、百済王善光が彼らを率いて薬や珍異を奏上している。

○天武葬送での誄奏上「貴種性」

『日本書紀』朱鳥元年九月丁卯条「丁卯。僧尼發哀之。是日百済王良虞代百済王善光而誄之。次國々造等随參赴各誄之。仍奏種々歌舞。」

百済王良虞の誄奏上は、蕃国の王を列席させ、日本の貴族達だけではなく、天皇は蕃国の王からもその徳を慕われていると言う演出であり、日本国や天皇の地位を相対的に上げるために行われた。

○持統朝「貴種性」

『日本書紀』持統五年正月己卯条「己卯。賜公卿飲食。衣裳。優賜正廣肆百済王余禪廣。直大肆遠寶。良虞。與南典。各有差。」

公卿以外では百済王氏のみが天皇から品を下賜されている。

○聖武期における楽や舞の奏上 「先進文化・異文化の担い手」

『続日本紀』 天平十二年二月丙子条

「丙子。百濟王等奏_二風俗樂_一。授從五位下百濟王慈敬從五位上。正六位上百濟王全福從五位下_一。」

『続日本紀』 天平十六年二月丙辰条

「丙辰。幸_二安曇江_一遊_二覽松林_一。百濟王等奏_二百濟樂_一。詔授_二无位百濟王女天從四位下_一。從五位上百濟王慈敬從五位下孝忠。全福並正五位下_一。」

『続日本紀』 天平神護元年十月戊子条

「戊子。幸_二弓削寺_一礼_レ佛。奏_二唐高麗樂於庭_一。刑部卿從三位百濟王敬福等亦奏_二本國舞_一。」

善光の孫世代にも、帰化以前から代々伝えられてきた、百濟の楽や舞が伝承されていたことの例。

○大佛建立 「先進文化・異文化の担い手」

『続日本紀』 天平神護二年六月壬子条 「壬子。刑部卿從三位百濟王敬福薨。(略)天平年中。仕至_二從五位上陸奥守_一。時聖武皇帝造_二盧舍那銅像_一。冶鑄云畢。塗金不_レ足。

而陸奥國馳_レ驛。貢_二小田郡所_一出黃金九百兩_一。我國家黃金從_レ此始出焉。聖武皇帝甚以嘉尚。授_二從三位_一。遷_二宮内

卿。俄加_二河内守_一。勝寶四年拜_二常陸守_一。遷_二左大弁_一。類歷_二出雲。讃岐。伊豫等國守_一。神護初。任_二刑部卿_一。薨時年六十九。」

日本で初めて金を産出し、それを当時聖武天皇が中心となっていた一大国家計画である大仏建立のために貢上した。

○桓武天皇の交野行幸 「貴種性」

『続日本紀』 延暦二年十月戊午条

「戊午。行_二幸交野_一。放_レ鷹遊獵。」

『続日本紀』 延暦六年十月丙申条

「丙申。天皇行_二幸交野_一。放_レ鷹遊獵。以_二大納言從二位藤原朝臣繼繩別業爲_二行宮_一矣。」

『続日本紀』 延暦十年冬十月丁酉条

「冬十月丁酉。行_二幸交野_一。放_レ鷹遊獵。以_二右大臣別業爲_二行宮_一。」

『類聚国史』 32天皇遊獵 延暦十一年九月庚辰条

「庚辰、遊_二獵於交野_一。」

『類聚国史』 32天皇遊獵 延暦十二年十一月乙酉条

「乙酉、遊_二獵於交野_一、右大臣從二位藤原朝臣繼繩献_二摺

衣^一、給^二五位已上及命婦采女等^一。」

『類聚国史』 32天皇遊獵 延暦十三年九月壬辰条

「壬辰、遊^二獵于交野^一。」

『類聚国史』 32天皇遊獵 延暦十三年冬十月壬子条

「壬子、遊^二獵於交野^一、賜^二百濟王等物^一。」

『類聚国史』 32天皇遊獵 延暦十四年三月甲午条

「甲午、遊^二獵于交野^一。」

『日本紀略』 延暦十四年冬十月己卯条

「己卯、幸^二交野^一、以^二右大臣藤原繼繩別業^一、為^二行宮^一。」

『日本後紀』 延暦十八年二月壬午条

「壬午、行^二幸交野^一。」

『日本後紀』 延暦十八年十月己卯条

「己卯、遊^二獵于交野^一。」

『日本紀略』 延暦十九年冬十月壬午条

「壬午、幸^二交野^一。」

『日本紀略』 延暦二十二年冬十月壬辰条

「壬辰、幸^二交野^一。」

後に詳細に述べるが、交野は百済王氏の本拠地である。また、交野での遊獵とは交野禁野での遊獵であり、その禁野の管

百済王氏存続の要因（山下剛司）

理者は百済王氏である。これは偏に桓武天皇と百済王氏との繋がり¹⁵の強さを示している。桓武天皇の母高野新笠は皇族や藤原氏等の高貴な家柄ではなく、百済系帰化氏族の出身である。そこで、「詔曰。百済王等者朕之外戚也。」と、百済王氏を自らの外戚とすることで、同じ百済の王族の血を引く一族である母の一族も天皇の外戚であるとして、母の出身氏族を名目上高貴なものにし、その結果、自らの母親の身分を上昇させようとしたのである。また、百済王の子孫を支配することで、桓武天皇自らが帝としての意識を強調するものでもあった。

○百済寺への施入 「貴種性」

『続日本紀』 延暦二年十月庚申条

「庚申。詔免^二當郡今年田租^一。國郡司及行宮側近高年。并諸司陪從者。賜^レ物各有^レ差。又百済王等供^レ奉行在所^一者一兩人。進^レ階加^レ爵。施^二百済寺近江播磨二國正稅各五千束^一。授^二正五位上百済王利善從四位下。從五位上百済王武鏡正五位下。從五位下百済王元德。百済王玄鏡並從五位上。從四位上百済王明信正四位下。正六位上百済王眞善從五位下^一。」

『類聚国史』 182施入物 延暦十二年五月戊子条

「戊子、錢三十万、及長門・阿波両国稻各一千束、特施入河内国交野郡百濟寺」。

『類聚国史』182施入物 延暦十七年春正月壬辰条

「壬辰、河内国稻二千束、施入百濟寺」。

『類聚国史』99叙位32遊獵 弘仁五年二月己亥条

「己亥、山城守從四位下藤原朝臣繼彦、授從四位上、介外從五位下高丘宿祢弟越外從五位上、撰津守從四位下小野朝臣野主從四位上、介從五位下広根朝臣諸勝從五位上、河内守從五位上紀朝臣南麻呂正五位下、介從五位下大伴宿祢雄堅魚從五位上、賜四位已上袞、侍從并三國掾已上衣、目已下及郡司綿各有差、佐為及百濟寺、施綿各一百屯」。

桓武天皇が百濟王氏の氏寺である百濟寺へ施入することで、桓武天皇の外戚として他氏族よりも優遇されていることを表している。

○交野での祭祀 「貴種性」

『統日本紀』延暦四年十一月壬寅条

「壬寅。祀天神於交野柏原。賽宿禰也。」

『統日本紀』延暦六年十月己亥条

「己亥。主人率百濟王等二奏二種種之樂。授從五位上百濟王玄鏡。藤原朝臣乙叡並正五位下。正六位上百濟王元眞。善貞。忠信並從五位下。正五位下藤原朝臣明子正五位上。從五位下藤原朝臣家野從五位上。无位百濟王明本從五位下。是日還宮。」

『統日本紀』延暦六年十一月甲寅条

「十一月甲寅。祀天神於交野。其祭文曰。維延暦六年歲次二丁卯十一月庚戌朔甲寅。嗣天子臣謹遣從二位行大納言兼民部卿造東大寺司長官藤原朝臣繼繩。敢昭告于昊天上帝。臣恭膺眷命。嗣守鴻基。幸賴穹蒼降祚覆燾騰微。四海晏然万姓康樂。方今大明南至。長晷初昇。敬采燔祀之義。祇修報德之典。謹以玉帛犧齊粢盛庶品。備茲禋燎。祇薦潔誠。高紹天皇配神作主尚饗。又曰。維延暦六年歲次二丁卯十一月庚戌朔甲寅。孝子皇帝臣諱謹遣從二位行大納言兼民部卿造東大寺司長官藤原朝臣繼繩。敢昭告于高紹天皇。臣以庸虛忝承天序。上玄錫祉率土宅心。方今履長伊始。肅事郊禋。用致燔祀于昊天上帝。高紹天皇慶流長發。德冠思文。對越昭升。永言配命。謹以制幣犧齊粢盛庶品。式陳明薦。侑神作主尚饗。」

『続日本紀』延暦十年冬十月己亥条

「己亥。右大臣率_二百濟王等_一。奏_二百濟樂_一。授_二正五位下藤原朝臣乙叡從四位下。從五位下百濟王玄風。百濟王善貞並從五位上。從五位下藤原朝臣淨子正五位下。正六位上_二百濟王貞孫從五位下_一。」

桓武天皇の中華皇帝としての地位確立のため、天壇を築き、天帝を祀っている。桓武天皇の奉仕者・蕃国の王としての役割を期待されたのが百濟王氏である。また、藤原繼繩の妻は百濟王明信であり、桓武天皇・大納言藤原繼繩と、百濟王氏の血縁関係もこれに大いに関係していることが分る。

○桓武朝での樂奏上「先進文化・異文化の担い手」

『続日本紀』延暦六年十月己亥条

「己亥。主人率_二百濟王等_一奏_二種種之樂_一。授_二從五位上百濟王玄鏡。藤原朝臣乙叡並正五位下。正六位上百濟王元眞。善貞。忠信並從五位下。正五位下藤原朝臣明子正五位上。從五位下藤原朝臣家野從五位上。无位_二百濟王明本從五位下_一。是日還_レ宮。」

『続日本紀』延暦十年冬十月己亥条

「己亥。右大臣率_二百濟王等_一。奏_二百濟樂_一。授_二正五位下

百濟王氏存続の要因（山下剛司）

藤原朝臣乙叡從四位下。從五位下百濟王玄風。百濟王善

貞並從五位上。從五位下藤原朝臣淨子正五位下。正六位上_二百濟王貞孫從五位下_一。」

帰化から百年以上経過しても、一族内において百濟独自の文化を相伝していることの証し。

○桓武天皇の朕外戚也「貴種性」

『続日本紀』延暦九年二月甲午条「(略)是日。詔曰。百濟王等者朕之外戚也。今所以擢_二兩人_一。加_二授爵位_一也。」

桓武天皇の母が高野氏。百濟系氏族の出身で、母の地位を上げるためにも、「百濟王等者朕之外戚也」という言葉があった。

○津連の奏上「貴種性」

『続日本紀』延暦九年秋七月辛巳条

「秋七月辛巳。左中弁正五位上兼木工頭百濟王仁貞。治部少輔從五位下百濟王元信。中衛少將從五位下百濟王忠信。圖書頭從五位上兼東宮學士左兵衛佐伊豫守津連眞道等上_レ表言。眞道等本系出_レ自_二百濟國貴須王_一。貴須王者百濟始興第十六世王也。夫百濟太祖都慕大王者。日神降_レ

靈。奄_レ扶餘_レ而開_レ國。天帝授_レ錄。惣_レ諸韓_レ而稱_レ王。降及_レ近肖古王_レ。遥慕_レ聖化_レ。始聘_レ貴國_レ。是則神功皇_レ后攝政之年也。其後輕嶋豐明朝御宇應神天皇。命_レ上毛野氏遠祖荒田別_レ。使_レ於百濟_レ搜_レ聘有識者_レ。國主貴須王恭奉_レ使_レ旨_レ。擇_レ採宗族_レ。遣_レ其孫辰孫王_レ一名智宗王隨_レ使入朝。天皇嘉焉。特加_レ寵命_レ。以爲_レ皇太子之師_レ矣。於是。始傳_レ書籍_レ。大闡_レ儒風_レ。文教之興。誠在_レ於此_レ。難波高津朝御宇仁德天皇。以_レ辰孫王長子太阿郎王_レ爲_レ近侍_レ。太阿郎王子亥陽君。亥陽君子午定君。午定君生_レ三男_レ。長子味沙。仲子辰尔。季子麻呂。從此而別始爲_レ三姓_レ。各因_レ所職_レ以命_レ氏焉。葛井。船。津連等即是也。逮_レ于他田朝御宇敏達天皇御世_レ。高麗國遣_レ使上_レ鳥羽之表_レ。群臣諸史莫_レ之能讀_レ。而辰尔進取_レ其表_レ。能讀巧寫。詳奏_レ表文_レ。天皇嘉_レ其篤學_レ。深加_レ賞歎_レ。詔曰。勤乎懿哉。汝若不_レ愛學_レ。誰能解讀_レ。宜_レ三從_レ今始近_レ侍殿中_レ。既_レ而又詔東西諸史_レ曰。汝等雖_レ衆。不_レ及_レ辰尔_レ。斯並國史家牒_レ。詳載_レ其事_レ矣。伏惟。皇朝則_レ天布化_レ。稽_レ古垂_レ風。弘澤_レ決乎群方_レ。觀政覃_レ於品彙_レ。故能修_レ廢繼_レ絕。萬姓仰而賴_レ慶_レ。正_レ名辨_レ物。四海歸而得_レ宜_レ。凡有_レ懷_レ生_レ。莫_レ不_レ扞躍_レ。眞道等先祖。委_レ質聖朝_レ。年代深遠。家傳_レ文雅之業_レ。族掌_レ

西庠之職_レ。眞道等生逢_レ昌運_レ。預_レ沐_レ天恩_レ。伏望。改_レ換連姓_レ。蒙_レ賜朝臣_レ。於是。勅因_レ居賜_レ姓菅野朝臣_レ。」

百済系帰化氏族にとって百済王氏は故国の王であり、百済王氏が故国の文化を帰化以後も子孫に相伝しているように、百済系帰化氏族が百済王氏に対し尊崇の念を抱いていた可能性は否定できない。上表文冒頭、百済王氏が加署することによって、津連の出自に関する主張に真实性を持たせることができる。これが、百済王氏が百済系帰化氏族の管理者として、百済系帰化氏族側からも、朝廷側からもその様に認識されていた理由である。

○桓武天皇の後宮「貴種性」

『類聚国史』78賞賜 延暦十三年秋七月己卯条

「己卯、以_レ山背・河内・摂津・播磨等国稻一万一千束、賜_レ從三位百済王明信・從四位上五百井女王・從五位上置始女王・從四位上和氣朝臣広虫・因幡国造浄成等十五人、爲_レ作_レ新京家_レ也。」

『類聚国史』75曲宴 延暦十四年夏四月戊申条

「戊申、曲宴、天皇誦_レ古歌_レ曰、以邇之弊能、能那何浮流弥知、阿良多米波、阿良多麻良武也、能那賀浮流弥

知、勅^レ尚侍從三位百濟王明信^レ令^レ和^レ之、不^レ得^レ成焉、
天皇自代^レ和曰、記美己蘇波、和主黎多魯羅米、尔記多
麻乃、多和也米和札波、都祢乃詩羅多麻、侍臣称^二万
歲^一。」

『日本後紀』延曆十五年十一月丁酉条

「丁酉、無位嶋野女王・百濟王孝法・百濟王惠信・和氣
朝臣広子・橘朝臣常子・紀朝臣内子・紀朝臣殿子・藤原
朝臣川子・錦部連真奴等授^二從五位上、無位弓削宿禰美
濃人從五位下^一。」

『日本後紀』延曆十六年春正月辛亥条

「辛亥、能登国羽咋・能登二郡没官田并野七十七町、賜^二
尚侍從三位百濟王明信^一。」

『日本後紀』延曆十六年二月癸亥条

「癸亥、勅、從五位上嶋野女王・百濟王孝法・百濟王惠
信・和氣朝臣広子・橘朝臣常子・紀朝臣内子・紀朝臣殿
子・藤原朝臣川子・錦部連真奴・從五位下弓削宿禰美濃
人等位田、宜^二准^レ男給^レ之^一。」

『日本後紀』延曆十八年二月辛巳条

「辛巳、諱、〈嵯峨太上天皇〉於^二殿上^一冠、賜^二五位已上
衣被^一」從五位下清野宿祢最弟授^二從五位上、從三位百濟
王明信正三位、正五位上三嶋宿祢広宅從四位下^一、從五

位下高倉朝臣殿嗣為^二主計頭^一。」

『日本後紀』延曆二十三年秋七月己卯条

「己卯、觀相撲」授^二无位明□女王從五位上、從五位上
紀朝臣内子、川上朝臣真奴、百濟王惠信、藤原朝臣川
子、紀朝臣殿子正五位上、无位藤
原朝臣上子、橘朝臣御井子、紀朝臣乙魚、坂上大宿祢春子從
五位上^一。」

『日本後紀』延曆二十四年庚辰条

「庚辰、曲宴、賜^二次侍從以上衣^一」相模国大住郡田二町
賜^二從四位下百濟王教法^一。」

『日本後紀』大同三年六月甲寅条

「甲寅、山城国久世郡地六町賜^二高丘親王^一。」散位從三位
藤原朝臣乙叡薨。右大臣從^二位豐成之孫^一。右大臣贈從位
繼繩之子也。母尚侍百濟王明信被^二帝寵渥^一。乙叡以^二父
母之故^一。頻歷^二顯要^一。至^二中納言^一。性頑驕好^レ妾。而緣^レ
山臨^二水^一。多置^二別業^一。以信宿之。必備^二内事^一。推国天
皇為^二太子^一時。乙叡侍^レ宴。瀉酒不敬。天皇含^レ之。後遭^二
伊豫親王事^一。辟連^二乙叡^一。免歸^二于第^一。自知^レ無^レ罪。以^レ
憂而終。時年卅八。」

『日本後紀』弘仁二年正月甲子条

「甲子、(略)山城国乙訓郡白田一町、賜^二從四位下百濟

王教法」。

『日本後紀』弘仁六年十月壬子条

「壬子、散事從二位百濟王明信薨。」

百濟王教法は桓武天皇の女御。百濟王教仁は大田親王の母。百濟王貞香は駿河内親王の母であり、後宮での活動を多く見ることが出来る。

○課役・雑徭の免除「貴種性」

『令集解』賦役令没落外蕃条 延暦十六年五月二十八日付勅「勅。百濟王等遠慕皇化、航海梯山、輪款久矣。神功撰政之世則肖古王遣使貢其方物。輕嶋宇之年、則貴須王擇人献其才士。文教以之蔚興。儒風由其闡揚。煥乎斌々、于今為盛。又属新羅肆虐并吞扶餘。即拳宗婦仁、為我士庶、陣力從事、夙夜奉公。朕嘉其忠誠、情深衿愍。百濟王等課并雑徭、永從蠲除。勿有所事。主者施行。」

百濟王氏は他の帰化系氏族とは異なる存在であり、「百濟王から連綿と続いている存在」と朝廷は認識している。

○嵯峨天皇の交野行幸「貴種性」

『日本後紀』弘仁三年二月甲辰条

「甲辰、遊獵交野、山城、攝津、河内等国獻物、賜侍從以上及国宰掾已上衣被。」

『日本後紀』弘仁四年二月己亥条

「己亥、遊獵於交野、以山崎驛為行宮。」

『類聚国史』32遊獵 弘仁五年二月甲午条

「甲午、幸交野。」

『類聚国史』32遊獵 弘仁五年二月乙未条

「乙未、幸于交野、日暮御山崎離宮、河内国及掌侍從五位下安都宿祢吉子奉献、賜四位已上被、五位及百濟王等衣。」

『類聚国史』32遊獵 弘仁七年二月壬子条

「壬子、幸于交野。」

『類聚国史』32遊獵99叙位 弘仁七年二月丙辰条

「丙辰、遊獵於水生野、授從四位下百濟王教德從四位上、從七位下百濟王勝義從五位下、賜陪從從五位已上、山城河内摂津三国掾已上衣被、施捨佐為・百濟・粟倉僧尼三寺、各綿一百屯、是日、車駕至自交野。」

『類聚国史』31天皇行幸 弘仁八年二月丁未条

「丁未、幸_二交野_一。」

『類聚国史』 31天皇行幸 弘仁八年二月庚戌条

「庚戌、賜_二五位已上及山城河内摂津等国掾已上衣被_一、施_二佐為百済栗倉三寺、各綿百斤_一」是日、車駕至自交野。」

『類聚国史』 31天皇行幸 弘仁九年二月庚午条

「庚午、幸_二于交野_一。」

『類聚国史』 31天皇行幸 弘仁十年十月乙丑条

「乙丑、幸_二交野_一。」

『類聚国史』 31天皇行幸 弘仁十一年二月壬辰条

「壬辰、幸_二交野_一、五位已上及山城摂津両国司賜_二衣被_一。」

『類聚国史』 31天皇行幸 弘仁十二年十月庚寅条

「庚寅、車駕至_レ自_二交野_一、陪從親王以下、五位已上、山城摂津両国郡司、賜_レ祿有_レ差。」

『類聚国史』 32天皇遊獵 弘仁十三年冬十月甲午条

「甲午、幸_二河陽宮_一、遊_二獵于交野_一。」

『類聚国史』 32太上天皇遊獵 天長二年十月己酉条

「冬十月癸酉、太上天皇遊_二獵于交野_一。」

交野行幸は百済王氏の本拠地への行幸であり、嵯峨天皇の代

百済王氏存続の要因（山下剛司）

においても、桓武天皇の時と同じく親密な関係があった証と考えられる。

○嵯峨天皇の後宮「貴種性」

『類聚国史』 99叙位 天長二年十月甲寅条

「甲寅、授_二正六位上百済王教養從五位下、從五位上藤原三成正五位下、正六位上藤原豊繼從五位下_一。」

『日本後紀』 卷廿四弘仁六年二月庚申条

「庚申、百済王等奉獻、五位已上并六位已下及百済王等賜_レ祿有_レ差。」

『日本紀略』 天長七年二月丁巳条

「丁巳、授_二正四位下百済王慶命從三位_一。」

『日本紀略』 天長七年六月丁卯条

「丁卯、從三位百済王慶命、位封之外、特給_二五十烟_一。」

『日本紀略』 天長八年二月丙子条

「丙子、御_二紫宸殿_一、源朝臣定加_二元服_一、冷泉院為_二主人_一也、百済氏大夫等、相_二共献物_一、雅楽寮奏_二音声_一、賁次侍從以上祿、授_二百済王寬命從五位下_一。」

百済王貴命は嵯峨天皇の女御であり、基良親王・忠良親王・基子内親王の生母である。また、百済王慶命は尚侍であり、源

定・源鎮・源善姫の生母である。

以上、百済王氏の活動とそれに類する朝廷の動きを、時代を追って見てきたが、それらから何が読み取れたのかを改めてまとめてみたい。

帰化当初は「貴種性」によるものが目立ち、百済が滅亡してからの時間経過と共に、異国の王族としての周りの記憶が薄れていくと、奈良時代になると次第に「貴種性」が忘れ去られ、「先進文化・異文化の担い手」としての役割が重要性を増し、その方面において朝廷から期待されるようになる。そして、桓武・嵯峨朝において再び「貴種性」に着目されるようになる。これは、桓武天皇の生母が和氏という身分の低い百済系帰化氏族の出身で、その先祖が百済国王に行き着くことからである。そこで、百済王氏を外戚とし、百済王氏の地位を高めることで年代・世代は離れてはいるが、同じ百済国王の血を引く者同士として和氏の地位を上げ、その結果、自身の地位を高めようとしたのである。

このように、各時代により為政者側が百済王氏をどうとらえていたか、また、百済王氏側もどのように行動すれば朝廷内で生き残ることができたのかを模索し、双方の利害が一致したことにより、激動の飛鳥・奈良・平安初期を乗り越えることがで

きたのである。

三 百済王氏改姓の有無

(一) 百済王氏の改姓の有無

帰化系氏族が故国からの姓を改め、日本式の姓を名乗ることが朝廷の指導のもと、許可されやすくなる。⁽¹⁶⁾ そのため、多くの帰化系氏族が日本式に改姓していく。そのような流れの中で、百済王氏はどのように行動したのだろうか。

百済王氏が「百済王氏」から他の姓に改姓したという内容の記述を載せる資料は存在する。それは、「三松家系図」⁽¹⁷⁾である。この資料によると百済王豊俊という人物の代に「百済王」姓から「三松」姓に改姓したという注記がある。この注記によると、「庭前有古松三株世人因称三松遂為氏」とあり、つまり、豊俊の邸宅に松の株が三つ存在し、それにより「三松」と姓を改めたとある。百済系帰化氏族である百済王氏が自ら申請し、日本式の姓に改めたということは考えられないことではない。しかし、上野利三氏⁽¹⁸⁾は以下の点から、改姓が行われたとは言えないと述べられている。それは、「注記の改姓理由が他に例の無い不自然なものである点。」「国史に改姓記事がない点。」「豊俊という人物自体の存在が、他の資料では確認できない点。」

「改姓以降にも百済王姓の人物が官人として記録上に登場する点。」である。

以上の点から考えても、百済王氏が「三松」氏に改姓したとは考えがたい。つまり、百済王氏は他の帰化系氏族たちが日本式の姓に改姓していく中、帰化以来名乗り続けている百済王の姓を名乗り続けていたと考えるのが自然である。

(二) 他の「王」姓氏族

ここで一度視点を変えて、百済王氏以外にも「王」という姓を称する帰化系氏族が存在したことに目を向けてみよう。

それは「高麗王」氏と「肖奈王」氏である。この「王」姓については田中史生氏の論考が詳しい。⁽¹⁹⁾その論考によると、これら「王」姓への改姓は、当時の日本国における中華思想、つまり、朝鮮諸国よりも日本国の方が格上であるという考え方から生み出されたものであり、日本に帰化してきた故国の王族を先祖に持つ氏族に「王」姓を下賜することにより、日本がその朝鮮諸国を支配していることを思想的に表現したものである。

百済王氏は百済国が日本に臣従していることを示し、高麗王⁽²⁰⁾氏は高麗（＝高句麗国）⁽²¹⁾が日本に臣従していることを示し、また、肖奈王氏は渤海国との外交関係で登場し、遣渤海使任命時に高麗朝臣に改姓され、高句麗国後身の渤海国が日本よりも格

下であることを象徴している。

これらの三「王」氏は日本の為政者内に存在していた中華思想により生み出されたものであり、また、外交問題の変化から王姓を持つ氏族は改姓を余儀なくされたのである。高麗王氏については、その経歴や活動が六国史上不明であり、政治や外交の表舞台には登場しなかったようである。また、肖奈王氏から遣渤海使任命時に改姓させられた高麗朝臣は外交の面に置いて活躍した後、高倉朝臣⁽²³⁾と改姓され、中央貴族としての道を歩むこととなる。

本来は中華思想上必要とされた「王」氏であったが、為政者が海外との関係ではなく、その目が国内に向き、その重要度が低下すると日本式の姓に改められ、彼らが特別に担わされていた職務は終るのである。

田中氏が挙げられた以外にも「王」姓氏族の存在が確認できる。『新撰姓氏録』諸蕃右京高麗の項に「後部王、同國長王周之後也」とあるのがそれである。

天武天皇五年に高麗遣大使後部王博阿が来日した記事がある⁽²⁴⁾ので、それ以降帰化したようである。後部王氏は田中論考で扱われた「王」氏とは異なり、帰化以前からこの姓を名乗っている⁽²⁵⁾、帰化後もその姓を名乗り続ける。叙任記事や蝦夷での勲功⁽²⁶⁾でその活動を確認することができる。そして、天平宝字五年三月、

他の帰化系氏族と共に日本式に改姓⁽²⁷⁾している。彼らにとって
は、帰化系氏族として得られるものよりも、日本式の姓を名乗
り周囲に溶け込んだ方が暮らしやすい状況となっていたのであ
ろう。

(三) 百済王氏は何故、改姓しなかったのか

前項では、日本の為政者の内に存在した中華思想により
「王」姓を名乗らされ、また、同様の理由から日本式に改姓さ
せられた諸氏を見た。では、何故百済王氏は他の帰化系氏族や
先項でみた肖奈王氏のように改姓を行わなかったのであろう
か。

『江家次第』巻第二正月乙叙位には、「御即位。伴・佐伯開
門、和氣・百済功臣後、或氏」とある。これは、百済王氏が天
皇即位時に和氣氏と共に叙位されるという記事で、上野氏の研
究⁽²⁸⁾によれば、氏爵による天皇即位時における叙位は永正十八年
(一五二一)まで時代を降り確認することができる。少なくと
もその時期までは、百済王氏はその姓を名乗り続けていたこと
が確認できる。

他の帰化系氏族が改姓していったのは、元々大陸や朝鮮半島
より渡来時の氏族名を名乗ることにより、日本には存在しな
い、また、日本よりも進んだ文化・技術を保持し、それを特色

として朝廷に仕え、独自の地位を確立するためであった。しか
し、時代が降るにつれ、日本に帰化してから幾世代も経つと、
彼らが有していた進んだ文化・先進技術は日本国内においても
普遍的なものとなり、彼らの特色であった異国から先進の文化
や技術を携え、それを持って朝廷に仕えるということの特色が
失われてしまい、帰化系氏族でいる意味が喪失してしまったの
である。それにより多くの帰化系氏族はその姓を日本式の姓に
変え、帰化系氏族としてでは無く、日本の他の氏族と同様に朝
廷に仕える道を選択したのである。

では何故、百済王氏は他の帰化系氏族と同様に改姓しなかつ
たのか。それは、百済王氏は改姓しなくても、「氏爵」にあず
かり、「禁野の管理」という確約された職務があるからである。
自らの高貴な出自を表す姓を消してまで、改姓する必要が無か
ったのである。

四 交野禁野の管理者

百済王氏を語る上で欠かせない要因が二つある。一つが、今
まで述べてきた中央貴族としての一面であり、もう一方が禁野
の管理者という一面である。

禁野とは、皇室の御獵場として一般の狩獵を禁止した原野で

あり、その初見は持統天皇紀にまで遡ることができる。では、百済王氏はどの地の禁野を管理していたのだろうか。『拾芥抄』巻中 宮城部第十九には、「禁野 北野有別当 交野以百済王為檢校 宇陀野」とあり、河内国に存在した交野禁野について、百済王氏が檢校していたことがわかる。

桓武・嵯峨天皇の交野行幸・狩獵とはつまり、百済王氏が管理している交野禁野への行幸であり、他の行幸とは異なり天皇と百済王氏との個人的な関係強化が伺われる。

また、『大日本史料』第三編之一・二〇―二九頁、応徳三(二〇八六)年十二月十六日の「御即位叙位部類」に、「次被叙百済王基貞 件人禁野司小口也、同被尋、予令申云、百済王二人、以禁野已為先云々可被用由令申了、依被叙也。」とあり、応徳の時点では、百済王氏はまだ交野禁野に居住していたことが指摘できる。

前項と合わせて考えるなら、百済王氏という一族は、交野禁野の監督者という職務を担いながら、天皇の代替わりごとに氏爵に預かる氏族として、存続し続けていたことが分かる。

まとめ

朝廷が百済王氏に求めるもの、つまり百済王氏の担う役割は

時代ごとに変化していった。百済滅亡前後は、百済の王族としての「貴種性」が着目され、奈良時代に入り時間の経過と共に、次第に彼らの「貴種性」は忘れ去られていった。聖武期にはいると、「先進文化・異文化の担い手」として朝廷に出仕し、帰化人であるという素養を多いに活かし、日本国では貴重である大陸・朝鮮半島由来の文化や技術をもって活躍した。さらに、桓武・嵯峨朝に入ると、百済王直系の子孫としての「貴種性」が再び注目・利用されるようになる。

このような、朝廷側が彼ら百済王氏に求めた役割を、意識的に行ったのか結果的にそうなったのかは判断できないが、しかし、朝廷側の希求に応じる形で一族は繁栄していったのである。

嵯峨朝以降、為政者の目が海外ではなく、国内に向けられていくようになった結果、百済王氏が有していた他の氏族には無い特色「貴種性」と「先進文化・異文化の担い手」、これが共に認識されなくなり、中央政界においての華々しい活躍は見出せ無くなってしまう。

しかし、天皇の代替わりごとに氏爵に預かり、交野禁野の管理者としての実務を担うことで百済王氏はそれ以降も存在し続けていたのである。

註

- (本文・註釈における傍線部は著者が付したものである。)
- (1) 村尾次郎「奥羽建設と百済王氏」『日本諸学研究報告』第一七編(歴史学文部省数学局編・一九四二)等。
 - (2) 今井啓一『百済王敬福』(綜芸舎・一九六五)
 - (3) 大坪秀敏「百済王氏賜姓に関する一考察」『国史学研究』一三(一九八七)
 - 「聖武天皇の難波行幸に関する一試論―百済王氏との関連性を中心に―」『国史学研究』一一(一九八五)
 - 「百済王氏交野移住に関する一考察」『龍谷史壇』九六(一九九〇)
 - 「大仏造営過程における百済系渡来人」『国史学研究』一(一九八九)
 - 「藤原仲麻呂政権下における百済王氏」『歴史と伝承』(永田文昌堂・一九八八)
 - 「称徳・道鏡政権下における百済王氏」『龍谷史壇』九九(一九九二)
 - 「桓武朝における百済王氏」『龍谷詩壇』一一九・一二〇合併号(二〇〇三)
 - (4) 利光三津夫『律令制とその周辺』第二章(慶応義塾大学法学研究会・一九六七)
 - (5) 長瀬一平「白村江敗戦における「百済王権」について」『千葉史学』六(一九八五)
 - (6) 寛敏生「百済王姓の成立と日本古代帝国」『日本歴史』三一七(一九八九)
 - (7) いくつか例を挙げると、太秦公宿禰氏は秦始皇帝十三世孫である孝武王の子孫を主張し、和氏は百済国都慕王十八世孫の武寧王の子孫、また、高麗朝臣は高句麗王好台七世孫の延興王の子孫を一族の始祖としている。
 - (8) 豊璋王子について、義慈王と父子関係に当たるとのかどうか疑問視されていて、いくつかの論考が発表されている。宋浣範「七世紀の倭国と百済―百済王子豊璋の動向を中心に―」『日本歴史』六八六(二〇〇五)や、西本昌弘「豊璋と翹岐―大化改新前後の倭国と百済―」『ヒストリア』一〇七(一九八五)等。
 - (9) 『日本書紀』舒明天皇三年三月庚申朔条「三月庚申朔。百済王義慈入王子豊璋爲質。」
 - (10) 『日本書紀』齐明天皇六年十月条「冬十月。(略)而百流國還頼天皇護念。更鳩集以成邦。方今謹願。迎百済國遣侍天朝王子豊璋。將爲國主。云云。」
 - (11) 『日本書紀』齐明天皇六年冬十月条「冬十月(略)或本云。天皇立豊璋爲王。立塞上爲輔。而以禮發遣焉。」
 - (12) 『日本書紀』天智天皇二年九月甲戌条「甲戌。日本船師及佐平余自信。達率木素貴子。谷那管首。憶禮福留。并國民等至於弓禮城。明日發船始向日本。」
 - 『日本書紀』天智天皇五年是冬条「是冬。京都之鼠向近江移。」以百済男女二千餘人居于東國。凡不擇縞素。起癸亥年至于三歲並賜官食。倭漢沙門知由獻指南車。」
 - 『日本書紀』天智天皇八年是歲条「是歲。遣小錦中河内直鯨等使於大唐。又以佐平餘自信。佐平鬼室集斯等。男女七百餘人遷居近江國蒲生郡。又大唐遣郭務棕等二千餘人。」
 - (13) 摂津国に百済王氏を中心として百済郡を建て、郡内に百済王氏の氏寺である百済寺と百済尼寺を建立する。また、百済国からの移民に対し、故国の位階に応じた日本の官位を授ける。これらの政策は、百済系帰化人に対し、故国百済王族がまだ健在

で、日本国内でもその地位に相応しい待遇を受けていることを示すことにより、百済王氏の元に百済系帰化氏族を組織化した。そして、朝廷はその組織の長である百済王氏を支配していれば、他数の百済系帰化氏族を、百済王氏を通して支配できる。つまり、【朝廷↓百済王氏↓百済系帰化氏族】という支配機構を作り上げたのである。

- (14) 百済王氏と賜姓される以前の例であるが、百済国の王子時代の豊璋は養蜂を行っている。『日本書紀』皇極二年癸卯是歲条「是歲、百済太子餘豊以蜜蜂房四枚放養於三輪山。而終不蕃息。」これは、倭国における養蜂の初見であり、日本には無い先進技術の実践の例である。

- (15) 『続日本紀』延暦九年二月甲午条。

- (16) 『日本後紀』延暦十八年十二月甲戌条「甲戌。甲斐國人止彌若虫。久信耳鷹長等一百九十人言。已等先祖。元是百済人也。仰慕聖朝。航海投化。即天朝降綸旨。安置攝津職。後依丙寅歲正月廿七日格。更遷甲斐國。自爾以來。年序既久。伏奉去天平勝寶九歲四月四日勅稱。其高麗百済新羅人等。遠慕聖化。來附我俗。情願改姓。悉聽許之。而已等先祖。未改蕃姓。伏請蒙改姓者。賜若虫姓石川。鷹長等姓廣石野。(略)」

- (17) 大阪府枚方市に鎮座する百済王神社の社家に伝わるとされる系図。本論では『古代豪族系図集覧』（東京堂出版・一九九三）を用いた。

- (18) 上野利三『前近代日本の法と政治』（北樹出版・二〇〇二）第四章「百済王三松氏系図」の史料価値について」第四章「百済王三松氏系図」の史料価値について」参照。

- (19) 田中史生「王」姓賜与と日本古代国家『国史学』一五二号（一九九四）

- (20) 『続日本紀』大宝三年四月乙未条「(略) 從五位下高麗若光賜王姓」

- (21) 『続日本紀』天平十九年六月辛亥条「辛亥。正五位下背奈福信。外正七位下背奈大山。從八位上背奈廣山等八人。賜背奈王姓。(略)」

- (22) 『続日本紀』天平勝宝二年正月丙辰条「丙辰。從四位上背奈王福信等六人賜高麗朝臣姓。(略)」

- (23) 『続日本紀』卷卅五宝龜十年三月戊午条「戊午。從三位高麗朝臣福信賜姓高倉朝臣。」

- (24) 『日本書紀』天武天皇五年十一月丁亥条「丁亥。高麗遣大使後部王博阿子。副使前部大兄德富朝貢。仍新羅遣大奈末金楊原送高麗使人於筑紫」

- (25) 『続日本紀』和銅五年正月戊子条「戊子。(略) 從六位下後部王同竝從五位下。」

『続日本紀』天平元年三月甲午条「甲午。天皇御大極殿。(略) 正六位上巨勢朝臣奈氏麻呂。紀朝臣飯麻呂。大神朝臣乙麻呂。三國真人大浦。正六位下小治田朝臣諸人。坂上忌寸大國。正六位上後部王起。垣津連比奈並外從五位下。」

- 『続日本紀』天平勝宝六年正月壬子条「壬子。天皇御大安殿。(略) 正六位上佐伯宿祢大成。小野朝臣竹良。石川朝臣豐成。栗出朝臣人成。藤原朝臣武良士。後部王吉並從五位下。(略)」

- (26) 『続日本紀』神龜二年閏正月丁未条「丁未。天皇臨朝。詔叙征夷將軍已下一千六百九十六人勳位。各有差。(略) 從七位下後部王起。正八位上佐伯宿祢首麻呂。五百原君虫麻呂。從七位下君子龍麻呂。從八位上出部直佩刀。少初位上紀朝臣牟良自。正八位上田邊史難波。從六位下坂下朝臣宇頭麻佐。外從六位上九子大國。外從八位上國覽忌寸勝麻呂等一十人並勳六等。賜田

二町。」

禁野であつた。

(27) 『続日本紀』天平宝字五年三月庚子条「庚子。百濟人余民善

(やました つよし 特別研究員)

女等四人賜姓百濟公。韓遠智等四人中山連。王國嶋等五人楊津連。甘良東人等三人清篠連。刀利甲斐麻呂等七人丘上連。戸淨道等四人松井連。憶頼子老等卅一人石野連。竹志麻呂等四人坂原連。生河内等二人清湍連。面得敬等四人春野連。高牛養等八人淨野造。卓杲智等二人御池造。延爾豊成等四人長沼造。伊志麻呂福地造。陽麻呂高代造。烏那龍神水雄造。科野友麻呂等二人清田造。斯鵬國足二人清海造。佐魯牛養等三人小川造。王寶受等四人楊津造。荅他伊奈麻呂等五人中野造。調阿氣麻呂等廿人豊田造。高麗人達沙仁德等二人朝日連。上部王虫麻呂豊原連。前部高文信福當連。前部白公等六人御坂連。後部王安成等二人高里連。後部高呉野大井連。上部王弥夜大理等十人豊原造。前部選理等三人柿井造。上部君足等二人雄坂造。前部安人御坂造。新羅人新良木舍姓縣麻呂等七人清住造。須布呂比滿麻呂等十三人狩高造。漢人伯德廣足等六人雲梯連。伯德諸足等二人雲梯造。」

(28) 註(18) 同書 第二節「百濟王三松氏系図」考証 第三項の表において、六国史以降に登場する百濟王氏を列挙されている。

(29) 『日本書紀』持統天皇三年八月丙申条「丙申。禁斷漁獵於攝津國武庫海一千歩内。紀伊國阿提郡那耆野二萬頃。伊賀國伊賀郡身野二萬頃。置守護人。准河内國大鳥郡高脚海。」

(30) 交野禁野とは、河内国交野郡に存在した禁野の一つである。禁野は皇室の御獵場として、一般の狩獵を禁じた場所であつた。多くの禁野が荒廃する中、交野禁野は十六世紀末まで五節の神事に用いられる雉を献上するなど、最も長く存在し続けた